

氏名	齊藤みか
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第207号
学位授与年月日	2018年6月29日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	『竹取物語』の詩学 —『竹取物語』から「かぐや姫」へ— (The Poetics of <i>Taketori Monogatari</i> : from <i>Taketori Monogatari</i> to <i>Kaguya-hime</i>)
論文審査委員	主査 教授 ツベタナ I. クリステワ 副査 教授 石川透(慶応義塾大学) 副査 教授 佐野好則 副査 特任教授 大西直樹

論文内容の要旨

齊藤みか氏の博士論文は、日本最古の物語とされる『竹取物語』(十世紀の初め)の再解釈を試みた上、現代における作品の受容と教育問題と関連づけたものである。

『源氏物語』のなかで「物語の出で来はじめの祖」と賛称された『竹取物語』は、仮名文字の表現力を明かすことで、それ以降の物語文学のみならず、あらゆる作品やジャンルの発展のために重要な役割を果たしてきて、奈良絵本・絵巻物など、数多くの絵画作品によっても視覚化されてきたのである。現代も、中学校の教科書のなかで取り上げられており、児童本や絵本、漫画やアニメなどを通して、一般的によく知られている。しかし、主として「かぐや姫」と名づけられている『竹取物語』の加工文化の作品とオリジナルとの間にはあまりにも大きなギャップがあるので、『竹取物語』は最も誤解されている古典文学の作品であるともいえる。

本論文(312頁)は、序章、五つの章、終章に加えて、図、表、参考文献から成り立っている。第一章は、『竹取物語』の虚構性の分析となっている。この問題は、従来の研究の中心を成し、最も詳しく取り上げられてきた問題であるが、齊藤氏は議論をさらに発展させ、見逃されてきた解釈の可能性を紹介し根拠づけている。なかでも特に大きな貢献として評価できるのは、東アジアにおける「書」の役割を踏まえた、一般言語学の見

解を逸脱する仮名文字の表現力の考察、『オデュッセイア』との比較を通して行われた「そらごと」と「いつはり」の分析、和歌の再解釈と物語言説におけるその働きの考察という三つである。

第二章は、『竹取物語』の内容に焦点を合わせて、日本最古の生死論としての意味合いを徹底的に追究し、「心」という日本文化の基本概念を取り上げている。考察の対象となっているかぐや姫が属する月の世界と竹取の翁たちの世界の対比、またチベットの『斑竹姑娘』との比較は、従来の研究においても詳しく行われてきたのだが、ほとんどの場合、分析はそこで終わっているのに対して、齊藤氏による分析はそこから始まっている。つまり、「知」の形態としての日本古典文学の働きに着目し、メタ詩的レベルでの読みの可能性を根拠づけた上、『竹取物語』を生死論として再解釈しているのである。

第三章は、『源氏物語』をはじめ、『竹取物語』以降の文学作品におけるその痕跡を吟味し、受容の歴史をたどっている。なかでも特に興味深く思われるのは、中世の竹取説話の考察である。現存する『竹取物語』の最も古い写本が室町時代のものであるので、竹取説話の分析を通して『竹取物語』の成立と本来的な姿に関しても確認できると思われる。本論文は、問題提起にとどまり、今後の課題となる。

室町時代と江戸初期に普及していた『竹取物語』の奈良絵本と絵巻を取り上げた第四章は、本論文の大きな貢献として高く評価されるべきである。取り上げられた作品の数からしても、分析の深さからしても、「日本一」であると言える。考察は、かぐや姫の表現、翁の表現、求婚者の表現という三つに分けられており、そのいずれにおいても新鮮な仮説がたてられ、興味深い結論が導かれている。その一つは、発見された時のかぐや姫の姿である。すべての研究や注釈などは彼女を幼い子供と見なしているが、絵画においてはその場面がほとんど取り上げられておらず、数少ない例の場合、かぐや姫は幼い子供ではなく、かさね衣を着ている大人の女房のミニチュアとして描写されているので、物語全体の解釈も変わってくる。

第五章は、『竹取物語』から現代の『かぐや姫』への変遷をたどり、失われてきた意味について論じている。第一章と第四章と並んで、本論文の大きな貢献として認められるものである。絵本と国定教科書からジブリ映画の『かぐや姫物語』までに及ぶ考察は、現代解釈のステレオタイプの定着とその目的について厳しく問うている。「良い子」の育成のための道具とされてきた現代の『かぐや姫』の作品においては、日本最古の生死論としての『竹取物語』の意味合いの痕跡すらない。こうした犠牲はどのようにして根拠づけられるのだろうかという疑問を踏まえ、将来の課題について纏めている。

上に簡単に素描したように、本博士論文は、ICUの比較文化研究の可能性を全面的に生かしたモデル論文と呼びうるものである。

論文審査結果の要旨

本博士論文の審査は、ICUの教授三人と慶応義塾大学の石川透教授という四人の審査員から、ICUの規則の従って、二つの段階で行われてきた。2017年10月13日の最終草稿の審査を経て、最終審査は2018年5月25日の16:50から二時間余り、257会議室で行われてきた。審査公開のため、八人の大学院生も同席していた。

最終草稿の審査の段階で、内容から形式まで、すでに完成度の高いものだったので、審査員からは、和歌の分析、『オデュッセイア』との比較、奈良絵本・絵巻物の考察に関する細かい指示があった程度である。最終論文は、それらの指示を丁寧に反映していたので、論文のレベルがいつそう高まり、学問的貢献がより明確に現れてきた、と審査員の意見が一致したのである。それゆえ、最終審査は、実り多い議論となり、審査員のコメントは、将来の研究に関するアドバイスを集中した。

日本における奈良絵本・絵巻物を発展させた石川透教授は、斉藤氏による奈良絵本・絵巻物の分析を高く評価し、『竹取物語』の第一人者になりうると指摘した。そのため、博士論文のなかで取り上げなかった作品をも考慮し、現存するすべてのものを取り上げることを勧めた。さらに、中世説話の重要性に着目し、竹取説話をいつそう詳しく考察する上、「うぐいす姫」や「うりこ姫」など、不思議な誕生譚や「丸いもの」からの誕生譚の説話との比較を試みると、興味深い発見ができるとアドバイスした。最後に、比較文化的、トランス・メディア的といった論文のアプローチを褒めて、どの章も一つの論文になりうると評価した。他大学では、いずれか一つに集中しなければならなかったであろう。ICUだから、こうした論文ができたまとめたのである。

佐野好則教授は、虚構性の問題に焦点を合わせ、『オデュッセイア』と『竹取物語』の共通点と相違点について踏まえた。『オデュッセイア』は口承文学であるかどうかについては学者の意見が分かれているが、文字がなければ、ストーリーの展開ができないだろうと指摘した。そもそも、「語る」行為は「嘘」の可能性を孕んでいるという見解は、二つの作品の大きな共通点であるが、それがさらに「音声化」されるか「文字化」されるかは、相違点と見なされる。さらに、『竹取物語』とチベットの『斑竹姑娘』との間の共通点があまりに多いので、その理由について質問した。斉藤氏は、『斑竹姑娘』の成立についてはほとんど何も知られていないので、断定はできないが、『斑竹姑娘』は『竹取物語』を踏まえてできたものである、あるいは二つが同様の原点に基づいているという説明は有力であると説明した。

大西直樹教授は、哲学書としての『竹取物語』の解釈に強い感銘を受けたと述べ、論文は本として公開すべきであると強調した。一冊の本でなく、数冊の本になりうると指摘した。さらに、『竹取物語』は作者不明となっているが、作者は一人であるか、数人であるか、と質問した。斉藤氏は、一貫性の強い作品なので、作者は一人であろう、と意見を述べた上、現存する最古の写本が室町時代のものなので、それが『竹取物語』の本来の姿であるとは言い切れないという問題に着目した。

最後に、ツベタナ・クリステワ教授は、従来の研究には見られない和歌分析を評価し、物語における和歌の役割は読者と関連づけられると指摘した。つまり、「物語中の物語」といった求婚者譚が顕示するように、『竹取物語』の物語言説の大きな特徴の一つは、読者が登場人物よりたくさんの情報を持っているということである。和歌文法の対照性に基づいた和歌解釈は、それと同様の効果の可能性を促している。つまり、歌を詠んだ本人は一つの意味しか考えられていないが、「YES」も「NO」も同時に表す表現の使用は、読者による解釈のための「隙間」を確保し、パロディなどの効果をもたらしている。

齊藤みか氏は、すべてのコメントやアドバイスに対して感謝を表し、製本前にもできるだけの細かい訂正を試みる一方、将来の研究の課題とすると述べた。

最後には、主査はオーデイエンスにも質問やコメントを呼び掛け、自分の研究の参考になったというコメントがあった。

こうして博士論文の口述試験は、既述したように2018年5月25日(金)の16:50から教育研究棟257会議室で二時間かけて行われた。この口述試験の後、引き続き審査委員会を行った。審査員は、和歌の再解釈に基づいたテキスト分析、奈良絵本・絵巻物の考察、現代における受容の問題点など、論文の学問的貢献を高く評価し、博士論文審査に合格と判断した。